

<前回>：後期オリエンテーション

後期：自然神学の新しい可能性

1. 言語・解釈学から聖書へ
2. 聖書学の諸動向
3. 聖書学から政治思想へ

3-1：聖書と政治思想 3-2：アガンベン 1/14 3-3：ジジェク 1/21

Exkurs ・アガペーとエロス ・脳科学からキリスト教思想へ

<前回>パウロ研究から

(1) パウロ書簡のレトリック研究

1. William A. Beardslee, *Literary Criticism and New Testament*, Fortress, 1969.
 - ・伝統的な意味における文学批評＝資料批判：諸文書の著者の推定、複合的性格を持つ可能性の推定、背後にある資料の確認とその規模の推定など。緒論的議論。
 - ・新しい文学批評：内容と形式との関係、構造や形式の意義、言語表現のレトリック＝言葉の力（読者への影響、実在の指示）
2. Matthew R. Malcolm, *Paul and the Rhetoric of Reversal in I Corinthians. The Impact of Paul's Gospel on His Macro-Rhetoric*, Cambridge University Press, 2013.
3. In recent years, some scholars have sought to understand and illuminate the form of New Testament epistles by comparing them with the conventions established in Greco-Roman rethoric and in more sophisticated styles of letter-writing.

In 1975 Hans Dieter Betz published an article outlining how he proposed that Paul's letter to the Galatians could be analysed in the light of ancient rethoric, a proposal fully developed in his 1979 commentary on the letter. (Horrell, 2006, 51)

(2) パウロと政治思想・政治神学

A. 問題状況

4. Richard A. Horsley (ed.), *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004.

Protestant interpreters have traditionally understood Paul in opposition to Judaism. Luther's discovery of "justification by faith" in Paul's Letter to the Romans, the solution to his frustrating quest for a sense of righteousness, became the formative religious experience through which Paul's letters have been read. Paul became the paradigmatic *home religiosus* whose quest for salvation by a compulsive keeping of the Law in his native Judaism drove him to his dramatic conversion to God's grace manifested in Christ.

This approach to Paul that has dominated NT studies for generations is based on the unquestioned and distinctively modern Western assumptions that Paul is concerned with religion and that religion is not only separate from political-economic life, but also primarily a matter of individual faith. (Horsley, 2004, 1)

5. アメリカの聖書学会（SBL）の「聖書と帝国」分科会（*The Bible and Empire Unit*）
パウロ・ルネサンス、イエスからパウロへ
6. 現代思想におけるパウロ
7. 「政治神学への向けたパウロ」あるいは「パウロから政治神学へ」

B. 新約聖書の国家理解

C. ローマ書 13 章問題

14. 宮田光雄『国家と宗教——ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究』（岩波書店、2010年）では、「ヨーロッパ精神史」の全体においてローマ書 13 章の解釈史を辿っており、聖書内部（第一ペテロ）から始まり、古代、中世、宗教改革、近代、現代と緻密な議論が行われた。しかし、宮田氏の関心が、「4. 二つの世界大戦」にあること、特にナチスに対する教会闘争（その連関でのバルトとボンヘッファー）にあることは、ページ数からも明

瞭である。

「ローマ書十三章を歴史的に受容し継承する際に、パウロのテキストにふくまれていたものを、なお、どこまで引き出しえたかを検証し確認するための視点」(29 頁)が、ヨーロッパ精神史を見るポイントとされている。

ここで問われているのは、国家の権威が「神によって」立てられたことと国家を地上の世俗的の制度として相対化することとの関係理解、キリスト者の服従根拠としての「良心のため」と極限的状況下における不服従の可能性との関係理解、つまり、ローマ書 13 章と抵抗権との関連づけにほかならない。この問題連関は、古代以来、キリスト教思想が繰り返し直面したものであるが、ナチス政権下での教会闘争が現代キリスト教思想を評価する視座であることは疑いえない(この著書の第二部は、「近代日本思想史」であり、ここにもう一つの視座が設定されていることも重要である)。

D. パウロ研究と社会学的方法論

15. パウロに対しても、近年、従来の聖書学を越えた広範な研究の展開が見られる。「キリスト教と政治」といった問題設定はその代表的なものである。こうした議論を学的に成り立たせる方法論として、社会的(社会史的)な方法はますます重要性を増している。

16. Steven J. Friesen, Daniel N. Schowalter, and James C. Walters (eds.)

Corinth in Context. Comparative Studies on Religion and Society, Brill, 2010.

E. パウロと政治哲学

17. Dieter Geogri, *Theocracy in Paul's Praxis and Theology*, Fortress, 2009.

18. John Milbank, Slavoj Žižek, Creston Davis with Catherine Pickstock, *Paul's New Moment. Continental Philosophy and the Future of Christian Theology*, Brazos Press, 2010.

19. David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul*. Second Edition, T & T Clark, 2006.

questions have been asked about the cultural, political and social world which the early Christian inhabited, about the relationship between the early Christian groups and the wider society within which they were located, about the kinds of people who joined the Christian movement, rituals and structures of the earliest congregations, about how power and authority were exercised and legitimated within them and so on.

Gerd Theissen, Wayne Meeks (107)

Until relatively recently, the subject of Paul's relationship to the Roman Empire was somewhat neglected, especially compared with the dominant (and important) topic of Paul's relationship to Judaism.

Recent years have, however, seen a renewed interest in the subject of Christianity and the Roman empire, and more specifically the New Testament and the imperial cult.

the work of the 'Paul and Politics' Group at the annual meetings of the USA-based Society of Biblical Literature, published in a series of volumes edited by Richard Horsley. Paul's political stance is often assumed to be rather conservative and conformist Here Paul seems to urge Christian to quiet submission to the state, ... A different perspective, however, is presented in the work of Horsley and his colleagues, (113)

3. 聖書学から政治思想へ

3-1: 聖書学と政治思想

(A) 聖書における政治思想の前提

(1) 契約思想

「神—人間(共同体・民族→個人)」の関係=契約関係、人格関係における神(人格神)人格とは何か?

1. 契約の構造:「約束—信頼」 → 責任性・違反への罰則・人格的な関係

我々はいかにして他人の言葉を信頼するのか?

2. 契約の起源・由来(創造論)と契約の結末・成就(終末論)

3. 契約は人間の限定されるのか？ 人間中心主義？ 男性中心主義？

<創世記 1 章>

1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深遠の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

4 神は光を見て、良しとされた。

27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚。空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

<創世記 2 章>

15 主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。

<創世記 9 章>

9 「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。10 あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。

<創世記 15 章>

1 これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

5 主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」6 アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

17 日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。18 その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで、

(2) 王国・王権とは

4. 支配とは、だれが支配者か：12 部族連合から王政へ

多元的地方分権的システムと一元的中央集権的システム

<創世記 1 章>

27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

<サムエル上 8 章>

4 イスラエルの長老は全員集まり、ラマのサムエルのもとに来て、5 彼に申し入れた。「あなたは既に年を取られ、息子たちはあなたの道を歩んでいません。今こそ、ほかのすべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください。」6 裁きを行う王を与えよとの彼らの言い分は、サムエルの目には悪と映った。そこでサムエルは主に祈った。

5. 人間は自然の支配者か？ 創造論は人間中心主義？

6. 支配とは？

・人間の固有の使命：「神の像」

エデンの園の管理者・園丁

・古代イスラエルの王権→部族の利害の調停者 cf. オリエントの専制君主
→調停としての支配

・自然との関わりにおける二つの人間モデル

「地の支配」モデル／「地の僕」モデル

連帯性・連続性、「耕す」＝「奉仕する」

- ・「善悪の知識の木の実」を食べたことがもたらした結果としての地の搾取・破壊
- ・自然との関係をめぐる近代以前と以後における質的差異

7. 王権は不可避的な必要悪か？

王権の逸脱とそれでも支配者を求める人間

<サムエル上8>

7 主はサムエルに言われた。「民があなたに言うままに、彼らの声に従うがよい。彼らが退けたのはあなたではない。彼らの上にわたしが王として君臨することを退けているのだ。8 彼らをエジプトから導き上った日から今日に至るまで、彼らのすることといえば、わたしを捨てて他の神々に仕えることだった。あなたに対しても同じことをしているのだ。9 今は彼らの声に従いなさい。ただし、彼らにはっきり警告し、彼らの上に君臨する王の権能を教えておきなさい。」10 サムエルは王を要求する民に、主の言葉をことごとく伝えた。11 彼はこう告げた。「あなたたちの上に君臨する王の権能は次のとおりである。まず、あなたたちの息子を徴用する。それは、戦車兵や騎兵にして王の戦車の前を走らせ、12 千人隊の長、五十人隊の長として任命し、王のための耕作や刈り入れに従事させ、あるいは武器や戦車の用具を造らせるためである。13 また、あなたたちの娘を徴用し、香料作り、料理女、パン焼き女にする。14 また、あなたたちの最上の畑、ぶどう畑、オリーブ畑を没収し、家臣に分け与える。15 また、あなたたちの穀物とぶどうの十分の一を徴収し、重臣や家臣に分け与える。16 あなたたちの奴隷、女奴隷、若者のうちのすぐれた者や、ろばを徴用し、王のために働かせる。17 また、あなたたちの羊の十分の一を徴収する。こうして、あなたたちは王の奴隷となる。18 その日あなたたちは、自分が選んだ王のゆえに、泣き叫ぶ。しかし、主はその日、あなたたちに答えてはくださらない。」

(3) 社会正義、経済と政治

8. 政治は、支配と問いと結び付くと共に、社会正義の問いにおいて具体化する。

政治は、経済として経済から区別されつつも、相互に密接な関連性を構築している。

「欲望」という問題。

- ・近代キリスト教思想の前提→宗教の内面化・精神化＝私事化

聖と俗の二分法：宗教と経済を分離する暗黙の思考法

本来の宗教、キリスト教は、御利益宗教ではない。魂・心情の純粋さが宗教の真髄である。

しかし、献金とは、経済的な側面を有さないのか、聖職者は、実質的に職業化しているのではないか。建前論を超えられない、宗教の抽象的な議論。

- ・現実の宗教を批判的に分析する際に、この二分法には、限界がある。

↓

経済・富・欲望は社会正義に関連して、キリスト教にとって、常に隠れた争点として存在した。

この政治・経済と宗教とのリンクにこそ、宗教の根本的問いがある。

聖書の富者批判、愛の共産制、修道制の成立と展開、宗教改革、土着化など
まず、ここに問題の核心が存在することを認めるところから出発するとどうなるか。

9. Sallie McFague, "God's Household: Christianity, Economics, and Planetary Living," in: Paul F. Knitter & Chandra Muzaffar (eds.), *Subverting Greed. Religious Perspectives on the Global Economy*, Orbis Books, 2002.

Abstract

Religions help us from the basic assumptions about what we are and how we should act in the world. Presently, two worldviews with accompanying economic rules for planetary living vie for

our loyalty. One is the neoclassical market model with its ideology of greed and its goal of growth: the consumer society. The other is the ecological economic model with its creed of interdependence and its goal of planetary sustainability: the just society. Many Christians, particularly middle-class North Americans, are presently captive to the first model. Christianity should, however, advocate the second model --- the one that sees the good of all beings, including human beings, as dependent on a sustainable planet where resources are justly distributed. The ecological economic model is not Christian economics; rather, it is an economic model that faintly resembles the radical inclusiveness and open table of Jesus' Kingdom of God. It is better than the market model for human beings and the planet. It is also a more appropriate one for Christians to support. (119)

マクフェイグに対して

- ・エコロジカルな経済学の内実あるいは詳細は？
- ・エコロジカルな経済モデルを支える人間理解は、現代の自由主義対共同体主義という論争において共同体主義の立場に立つことになるのか？
- ・問題のグローバルな性格と多面的な取り組みという構図を描くことは可能か？ どこに多面的な諸立場がコミュニケーション可能になる地平を見出しうるのか？（自然神学？）
- ・単一の聖書的経済学ではなく、諸経済学の共有する方向性？ パルト的？

（４）聖書の宗教と経済との多様な関連性

10. 聖書から特定の政治システムを一義的に導出できない。経済・富の問題も同様である。富者批判という基調と祝福としての富理解まで。

↓

キリスト教思想は富に対して、いかなる理論を構築できるか？

11. 富者批判：

(1) 預言者の富者批判・弱者の視点、正義＝神の下の平等

「災いだ、偽りの判決を下す者、労苦を追わせる宣告文を記す者は。彼らは弱い者の訴えを退け、わたしの民の貧しい者から権利を奪い、やもめを餌食とし、みなしごを略奪する。」（イザヤ 10.1-2）

(2) 黙示文学：富める者の不正はこの世界の悪の支配の徴。神の国ではこの秩序は逆転。

「わざわざいなるかな、きみたち富める者。きみたちは、自分の富を頼みとした。しかし、きみたちは、自分の富を失うであろう」（エチオピア語エノク 94.8）

(3) イエスの富者批判。

「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」

「しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である。あなたがたはもう慰めを受けている。」

（ルカ 6:20-25）

(4) マリアの讃歌。

「思い上がる者を打ち散らし／権力ある者をその座から引き下ろし／富める者を空腹のまま追い返されます」、「身分の低い者を高く上げ／飢えた人を良いもので満たし」（ルカ 1:47-55）

(5) 原始キリスト教会と愛の共産主義（財産の共有）。

「信じた人々の群は心も思いも一つにして、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべて共有していた。」（使徒言行録 4:32）

12. 物質的な豊かさは神の祝福。→ 因果応報と核とする慣習的共同体的な知恵！

(1) 「主がわたしの主人を大層祝福され、羊や牛の群れ、金銀、男女の奴隷、らくだやろばなどをお与えになったので、主人は裕福になりました。」（創世記 24.35）

(2) 「もし、あなたがあなたの神、主の御声によく聞き従い、今日わたしが命じる戒めを

- ことごとく忠実に守るならば、あなたの神、主は、あなたを地上のあらゆる国民にはるかにまさったものとしてくださる。あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うならば、これらの祝福はすべてあなたに臨み、実現するであろう。あなたは町にいても祝福され、野にいても祝福される。あなたの身から生まれる子も土地の実りも、家畜の産むもの、すなわち牛の子や羊の子も祝福され、籠もこね鉢も祝福される。あなたは入るときも祝福され、出て行くときも祝福される。主は、あなたに立ち向かう敵を目の前で撃ち破られる。敵は一つの道から攻めて来るが、あなたの前に敗れて七つの道に逃げ去る。主は、あなたのために、あなたの穀倉に対しても、あなたの手の働きすべてに対しても祝福を定められ、あなたの神、主が与えられる土地であなたを祝福される。」(申命記 28.1-8)
- (3) 「主はその後のヨブを以前にも増して祝福された。ヨブは、羊一万四千匹、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭を持つことになった。彼はまた七人の息子と三人の娘をもうけ、長女をエミマ、次女をケツィア、三女をケレン・プクと名付けた。ヨブの娘たちのように美しい娘は国中どこにもいなかった。彼女らもその兄弟と共に父の財産の分け前を受けた。ヨブはその後百四十年生き、子、孫、四代の先まで見ることができた。ヨブは長寿を保ち、老いて死んだ。」(ヨブ 42.12-17)
- (4) 「主を畏れて身を低くすれば／富も名誉も命も従って来る。」(箴言 22.4)
- (5) 「神から富や財宝をいただいた人は皆、それを享受し、自らの分をわきまえ、その労苦の結果を楽しむように定められている。これは神の賜物なのだ。」(コヘレト 5.18)

13. 聖書における富の問題の多様性について

「聖書における富の問題に関して、まず確認すべき点は、聖書には富に対する統一見解など存在しないということである。旧約聖書においては、一方に、富を神からの祝福とする考えがあり——知恵文学には、不正な富の獲得は別にして、富自体を肯定的に捉える言葉が散見される——、他方、預言書や黙示文学では、貧富の格差や不正との関連における富あるいは富者への強烈の批判が見られる。新約聖書においても、旧約聖書の富者批判を受け継いだ議論(福音書、ヤコブ書、ヨハネ黙示録)から、富自体よりも富に固執する欲望へと批判の論点を移す議論(パウロ書簡、牧会書簡)まで、様々な見解が存在する。

見解の多様性を認めた上で、聖書全体に関しては次の点が指摘できる。(1)不正義や過剰な欲望と結びつく富は否定される。(2)富あるいは富者についての論評は、共同体(たとえば教会)が置かれた社会的文脈と相関的である。共同体が社会の経済的政治的な権力構造との関わりを深めるについて、富自体への否定的見解は後退する傾向が見られる。」(「富」『キリスト教平和学事典』教文館、2009年)

(B) 新約聖書の国家理解

(1) 旧約から新約へ

並木浩一「ヨブ記における契約——創造と救済」(『並木浩一著作集1 ヨブ記の全体像』日本キリスト教団出版局、2013年、260-271頁)

「筆者は契約を、神によって選ばれた民が歴史形成に参加する責任を自覚する源泉として理解する。この源泉は、それが枯渇して初めて民を愛する人々にその存在を気付かせる」(260-261)、

「彼らの言葉は国家が滅びた後にその重要性が一般に認識され、数々の預言書が編集されることとなった。預言者たちは民が神に立ち返ることを求めた。捕囚期までの預言者を「古典預言者」という。

「預言者たちは民のあり方の源泉を民族の創造期に求めた。その時に神と民との間に特別の関係が神の一方的な恵みによって樹立されたと確信した。民は神との交わりに招き入れられた。その関係をわれわれは契約と受け止める」(261)

「契約の民は武勇によってではなく、日常的に正義を行うあり方によって歴史を形成する。具体的に言えば、神の民にふさわしい社会は、人々が居住する町(実際には富裕層の発言

力が強い王国時代の未熟な都市的共同体)で、社会正義を守る法的な自治によって維持される。イスラエルでは王権が各地域の司法権を掌握できなかった。それぞれの町は王国時代には司法権を持つ自治団体であった」(262)

「アモスに始まる古典預言者にとってのイスラエルは、家長たちが土地を保有し、市民権を持つ自由農民の連合体である。これは兄弟盟約に基づく契約団体として認識される。神自身が兄弟盟約の主人である」、「ところが都市的精神が意味を持ち始めるべき時期、すなわち経済活動がようやく活発になった前八世紀に入ると、富者による都市支配が急速に進み、小農民は没落して自由民の権利を失った。それとともに自治と正義の精神は崩壊した」(262)、「イスラエルは兄弟盟約の主であるヤハウエを失い、この神もご自身の民を失うのである」、「預言者の警告は現実のものとなった」(263)

「ペルシアの支配下」。「すべての人々が申命記の民族観と祭司の指導体制を良しとしたわけではない」、「この時代にもなお、古い自律的な共同体における契約団体の伝統を大事にして兄弟盟約の精神に生きる道を捨てなかった少数の知識人がいた。彼らは祭司の指導を最小限度に押さえて、可能な限り市民の自律性を理念として保持しようと模索した人々である。ヨブ記者はその一人であったと考えられる。」(264)

「ヨブ記者はその作品において、古典預言者と同様に、社会正義の実行を重要視した。作品の主人公のヨブは、社会的な正義の実行において落ち度がないとのプライドに生きた擬人であった。彼が自己の潔白を確信する根拠がそこにあった」、「ヨブの二度目の独白の最初に置かれた二九章」(264)

「町の指導者ヨブの日常生活は突然、不条理な仕方で奪われた。その取り戻しがヨブにおける日常的なレベルでの「救済」であろう。虚構作品における救済の取り戻しではあるが、理念的には古典預言者が理想とした契約団体イスラエルの取り戻しである。その意味で、ヨブ記はイスラエルの契約の伝統を意識して記した書物であったと言ってもよい」、「ヨブは東方の異邦の民の一員として虚構的に想定されているにもかかわらず、神が樹立した彼との契約関係への固着は、彼がヤハウエ神とイスラエルとの関わりを知る信徒であることを物語る。」(265)

(2) 新約聖書の国家論の射程

1. 単一の国家論を導き出すことはできない。しかし、新約聖書の諸文書には、政治経済的な問いが繰り返し現れている。

古代キリスト教：迫害から国教化へ、敵対から協調へ。

迫害（規模も期間も様々、棄教者の問題）

66：ローマの大火、皇帝ネロによるキリスト教迫害。 第1次ユダヤ戦争(66-70)

95頃：ドミティアヌス帝時代のキリスト教迫害。 第2次ユダヤ戦争(132-135)

249：デキウス帝の迫害 303：ディオクレティアヌス帝、キリスト教を迫害。

2. イエス：論争における国家への言及→多様な解釈が可能、政教分離？

<マルコ12>

13 さて、人々は、イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして、ファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした。14 彼らは来て、イエスに言った。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているのでしょうか、適っていないのでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか。」15 イエスは、彼らの下心を見抜いて言われた。「なぜ、わたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨を持って来て見せなさい。」16 彼らがそれを持って来ると、イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた。彼らが、「皇帝のものです」と言うと、17 イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らは、イエスの答えに驚き入った。

- Richard A. Horsley, *Sociology and the Jesus Movement*, Continuum, 1989.
 , *Jesus and Empire. The Kingdom of God and the New World Disorder*,
 Fortress, 2003.

Introduction: American Identity and a Depoliticized Jesus

1. Roman Imperialism: The New World Disorder
2. Resistance and Rebellion in Judea and Galilee
3. Toward a Relational Approach to Jesus
4. God's Judgment of the Roman Imperial Order
5. Covenantal Community and Cooperation

Epilogue: Christian Empire and American Empire

3. ヨハネ黙示録：迫害下の教会 → 国家との敵対関係

<ヨハネ黙示録13～14>

15 第二の獣は、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。16 また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべての者にその右手か額に刻印を押させた。17 そこで、この刻印のある者でなければ、物を買うことも、売ることもできないようになった。この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である。18 ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は六百六十六である。

- 佐竹明『ヨハネの黙示録 上中下』（現代新約注解全書）、新教出版社、2007-2009年。
- 田川建三『キリスト教思想への招待』勁草書房、2004年。

第四章「終れない終末論」（243-320頁）

4. バーバラ・ロッシング (Barbara R. Rossing)

「新しいエルサレムにおける生命の川：地上の未来に対する環境論的ヴィジョン」

in: Hessel / Ruether (eds.), *Christianity and Ecology*, Harvard University Press, 2000.

- ロッシングの問題意識：黙示録を非環境論的であると解釈する（黙示録への懐疑論）のとは別の解釈の可能性、むしろ、ヨハネ黙示録を環境論者でフェミニストの新約聖書学者として積極的に読解することを目指している。「黙示録の目的は人々に強く勧め勇気を与え、神の審判と救済を宣言し、希望と正義のヴィジョンをもたらすことなのである。」
- そのためにロッシングが注目するのは、黙示録が提示する、バビロンとエルサレムという対照的な二つの都市のヴィジョン、二つの対照的な政治経済学のヴィジョンである。
- ローマ帝国の「現実化した終末論」（永遠のローマ、ローマの平和）。

ローマ帝国のグローバルな全能性は地中海の海洋交易が支えていた。黙示録は、このローマの全能と永遠性を転倒している。

- 都市の女性的形姿（人格化）による描写。「その主要な論争は、政治的で経済的であり、性差に関わるものではない。」(209)
- バビロンの政治経済学、バビロンの環境破壊。

「バビロンの売春の対する黙示録の批判は、性的ではなく、ローマの搾取的な貿易と経済支配に対して隠喩的に向けられている」(209)、「奴隷制と奴隷交易に対するもっとも明確な批判」

- 森林伐採、「裸の荒れ地」(17:16)

68-70年のユダヤ戦争についてのヨセフスの証言。

ローマは征服された土地を森林伐採した。グローバルな森林伐採。

- バビロンに対する新しいエルサレム、「もはや海はない」(21:1)

「神話論的な恐れ」は、黙示録にとって、海の主要な批判ではない。「黙示録は海を政治的に描いている」、「悪の場所」「交易船が航海する場所」

「もはや海はない」＝「ローマの貨物船と交易の終わり」

- ・別の経済的ビジョン、新しいエルサレム（生命の都）は環境論的。
 - ・「テキストがわれわれに呼び起こすのは、都市的で環境的な危機、グローバルな市場経済の危機のただ中における神への信頼である。」（214）
 - ・地上における神の家、都市生活のビジョン
地上からの脱出（携挙）ではなく、新しいエルサレムは「降りてくる」。
 - ・贈与的経済（a gift economy）
生命の水をすべての人に値なく飲ませる。われわれがエコシステムに対してダメージを与えることへの預言者的な批判
 - ・エゼキエルの新しい神殿のビジョンの拡張。
都には神殿がない(21:22)。神の現臨は神殿に限定されない。全被造物に広がる。
新しいエルサレムは人々を歓待する快適な都市
 - ・諸民族の癒やし。創世記 3:22 の禁止命令を克服する生命の木のビジョン。
- ・新しいエルサレムは未来のためのビジョンである。
「わたしたちは、よりよい近隣、聖なる都を描きながら希望を持ち続けねばならない。」
(219)

（3）パウロの共同体と経済

5. パウロの意義：市民社会のキリスト教、国教化以降の状況との合致

<ローマ 13>

1 人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。2 従って、権威に逆らう者は、神の定めを背くことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。3 実際、支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です。あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善を行いなさい。そうすれば、権威者からほめられるでしょう。4 権威者は、あなたに善を行わせるために、神に仕える者なのです。しかし、もし悪を行えば、恐れなければなりません。権威者はいたずらに剣を帯びているのではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるのです。5 だから、怒りを逃れるためだけでなく、良心のためにも、これに従うべきです。6 あなたがたが貢を納めているのもそのためです。権威者は神に仕える者であり、そのことに励んでいるのです。7 すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい。

6. Richard A. Horsley, *Covenant Economics. A Biblical Vision of Justice for All*, Westminster/John Knox Press, 2009.

Part 2: The Renewal of Covenantal Community

The Assemblies of Christ in the Letters of Paul

The movement, beyond Galilee

non-Judean (non-Israelite) people became interested and wanted to join. Paul and his coworker ... were soon establishing fledgling assemblies (*ekklesiai*) of Christ among non-Israelite in the cities of Greece.

the assemblies of Christ were communities with political-economic aspects inseparable from the religious aspect. (135)

Most significant economically, members of the assemblies of Christ were city dwellers, not peasants, and were slaves or artisans or underemployed wageworkers, not farmers in an agrarian village. (136)

New Testament scholarship has tended to construct a general synthetic picture of the "Hellenistic world" of the Greek cities in which the apostle Paul carried out his mission and early "Gentile

Christianity"developed. (137)

ekklesia, assembly, a network of smaller household-based communities

a nascent alternative society that separated itself from the dominant imperial society as much as possible. (140)

Paul advocated all of this community discipline and solidarity in the conviction that "the appointed time has grown short ..., for the present form of this world is passing away" (1 Cor. 7:29-31). ...

By that he did not mean that the whole cosmos, including societal life, was coming to a catastrophic end. He meant rather that the days of the Roman imperial order were numbered, that "the rulers of this age ... are doomed to perish" (1Cor. 2:6-8). (141)

There is no indication that any member of the assemblies of the Christ was from the extremely wealthy urban or provincial elite.

The picture in the book of Acts of a few well-off members is historically unreliable, certainly for the first generation or two. (142)

he understood the collection as the traditional economic reciprocity of villagers with one another. (144)

7. Richard A. Horsley, "Introduction," in Richard A. Horsley (ed.), *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004.

These many indications in Paul's Letters shows that his gospel and mission stood sharply opposed to Caesar and the Roman imperial order, and not to the Jewish Law. Hence, Pauline scholarship needs to take a keen interest in understanding why and in what ways Roman power and the Roman imperial order impinged upon, and were objectionable to, Paul and the people among whom he worked. Because of the separation of religion and politics in modern Western NT scholarship, however, it has generally been assumed that such questions were irrelevant to our understanding of Paul and his Letters. Thus, the field is only beginning to investigate the conflictualrelationship of Paul and the Roman imperial order.

This has been one of several interrelated areas of focus for the "Paul and Politics Group" of the Society of Biblical Literature, as exemplified in a number of contributions to a previous collection of articles. Accordingly, that group sponsored a session at the 2000 Annual Meeting on "Paul and the Roman Imperial Order," for which the papers by Efrain Agosto, Erik Heen, Jennifer Knust, and Abraham Smith were originally written. (5)